
原 著

ノディングズによる価値明確化理論への評価

中 野 啓 明

新潟青陵大学看護福祉心理学部福祉心理学科

Noddings' Evaluation of Values Clarification

Hiroaki Nakano

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY

要旨

本稿の目的は、価値明確化理論に対するネル・ノディングズの評価を考察することにある。

現代のアメリカにおいて、教室での授業実践に特に大きな影響を及ぼしている道德教育論としては、キャラクター・エデュケーション、道德的発達、価値の明確化の三つを挙げることができる。L.E.ラス、S.B.サイモン、M.ハーミン、H.カーシェンバウムは価値明確化理論の主唱者である。

『教育哲学』（1995,2007,2012）において、ノディングズはキャラクター・エデュケーション、道德的発達、価値の明確化という三つの道德教育理論に言及している。ノディングズは、価値明確化理論をデューイの倫理学理論を基礎とする道德教育論であるとしている。

ノディングズは、カーシェンバウムによって再公式化された価値明確化理論のバージョンが、諸結果に関する分析と複数の選択肢に関する考察という「批判的思考」を位置づけているという点において、デューイにより近づいているとしている。

デューイのいう「結果についての予期や予見」と、価値明確化理論で強調される「選択」を、価値づくりとしてのケアリングの視点から捉え直す必要がある。

キーワード

ネル・ノディングズ、価値明確化理論、ハワード・カーシェンバウム、批判的思考、選択

Abstract

This paper considers Nel Noddings' evaluation of values clarification.

Character education, values clarification, and the moral development approach are effective theories used in teaching practices in the United States. Advocates of values clarification include Louis E. Laths, Sidney B. Simon, Merrill Harmin, and Howard Kirschenbaum.

In *Philosophy of Education* (1995, 2007, and 2012), Noddings refers to three theories of moral education: character education, values clarification, and the moral development approach. Noddings states that values clarification is a moral education program based on John Dewey's ethical theory.

Noddings points out that the version of values clarification reformulated by Kirschenbaum is closer to Dewey's theory in its insistence on critical thinking, analysis of consequences, and consideration of alternatives.

It is necessary to consider Dewey's "anticipation or foresight of the outcome" and the "choosing" emphasized in values clarification from the viewpoint of caring as a valuing process.

Key words

Nel Noddings, values clarification, Howard Kirschenbaum, critical thinking, choosing

I 問題の所在

本稿では、現代のアメリカにおける道德教育論の一つである価値明確化理論に対して、教育学の領域におけるケアリング研究の第一人者であるノディングズ (Nel Noddings) がどのような評価をしているのか、またその評価にはどのような問題点があるのかを明らかにする。ノディングズのケアリング論に関しては近年では多くの研究成果が出ているけれども、現代のアメリカにおける道德教育論の一つである価値明確化理論との関係で論究した研究は、管見の限り、見いだすことはできない。

ところで、本稿でいう現代のアメリカにおける道德教育論とは、以下の3つである。

- ① キャラクター・エデュケーション (character education) の立場に立つ道德教育論
- ② 道德的発達 (moral development) の立場に立つ道德教育論
- ③ 「価値の明確化 (values clarification) 」の立場に立つ道德形成論

これら3つの道德教育論は、現代のアメリカにおける教室での授業実践に大きな影響を及ぼしている道德教育論である。

キャラクター・エデュケーションの立場に立つ道德教育論は、インカルケーション (inculcation) などの方法を持ちいて、教師が伝統的に望ましいと考えられている一定の諸徳を伝達しようとする。この立場を代表するものとしては、古くは人格発達連盟 (Character Development League) やアメリカ・キャラクター・エデュケーション研究所 (American Institute for Character Education)、近年ではトーマス・リコーナ (Thomas Lickona) やキャラクター・エデュケーション・パートナーシップ (Character Education Partnership) を挙げることができる。

1960年代から1970年代にかけて、新しい道德教育論として登場したのが、「価値の明確

化」の立場に立つ道德形成論と、道德的発達の立場に立つ道德教育論である。

後者の道德的発達の立場に立つ道德教育論は、6段階からなる道德性の発達段階を設定し、ジレンマ (dilemma) 資料に基づくモラル・ディスカッション (moral discussion) やジャスト・コミュニティ (just community) という方法を用いて道德的な発達を図ろうとするものである。この立場を代表するものとしては、コールバーグ (Lawrence Kohlberg) がいる。

一方、前者の「価値の明確化」の立場に立つ道德形成論は、価値を相対的なものとして、「書くことによる方略」や「対話による方略」、「討論による方略」等の方略 (strategy) を用いて、価値形成への援助を行っていかうとするものである。この立場を代表する者としては、ラス (Louis E. Laths)、サイモン (Sidney B. Simon)、ハーミン (Merrill Harmin)、カーシェンバウム (Howard Kirschenbaum) がいる。

なお、上記の①から③までの3つの現代道德教育論の中で、価値明確化理論とコールバーグ理論は、1990年代以降、アメリカ社会の教育問題を背景として、キャラクター・エデュケーションの立場から、批判を受けてもいる。

ノディングズは、(道德)教育の方法としてモデリング (modeling)・対話 (dialogue)・実践 (practice)・確証 (confirmation) を提唱しているだけでなく、現代の道德教育論についても言及している。すなわち、ノディングズは、『教育哲学』(1995年、2007年、2012年)、『道德的な人々に教育すること——キャラクター・エデュケーションへのケアリングからのもう一つの道——』(2002年)において、キャラクター・エデュケーション、コールバーグ理論、価値明確化理論について言及している。この中でも注目すべき点は、ノディングズが価値明確化理論をデューイの倫理学理論を基礎とする道德教育論であ

ると位置づけていることである。

ノディングズは、価値明確化理論について言及する際、価値明確化理論の代表的な著作である『価値と教授』だけでなくカーシェンバウム（Howard Kirshenbaum）の著作とチャザン（Barry Chazan）による分析を位置づけた上で、言及している。

そこで、本稿では、まずは、ノディングズが参照している価値明確化理論に関する諸著作を考察し、その論点を明らかにする。具体的には、価値明確化理論の「バイブル」とされているラス・ハーミン・サイモンによる共著である『価値と教授』における論点を明らかにした上で、『価値と教授』後の価値明確化理論を牽引してきたカーシェンバウムの著作、及びチャザンによる分析を考察する。なお、日本における価値明確化理論に関する研究では、分析の対象となる価値明確化理論の研究書としては『価値と教授』を対象としている場合が多い。¹⁾この意味で、カーシェンバウムに加えチャザンの研究を位置づけることは、日本における価値明確化理論の研究の進歩にもつながると思われる。

本稿では、『価値と教授』以降のカーシェンバウム、チャザンによる研究を位置づけることによってノディングズの思考過程を内在的に検証した上で、価値明確化理論に対するノディングズの評価を考察し、その論点と問題点を明らかにする。

Ⅱ 『価値と教授』における価値づくりの過程

『価値と教授』（1966年、1978年）は、ラス、ハーミン、サイモンによる共著であり、価値明確化理論の「バイブル」とされている文献であるため、まずは、この『価値と教授』の論点を示す。²⁾

『価値と教授』において示されている価値明確化理論の理論的特徴を端的に示すなら

ば、諸価値（values）よりも価値を形成していく過程としての価値づくり（valuing）の過程を重視していることにある。³⁾

ラスらは、価値とは経験の中から生まれた行動の一般的指針（general guides to behavior）のことであるがゆえに、異なった経験をするならば異なった価値が生じ、経験が蓄積し変化するならば価値も変化するという。「価値の明確化」においては、個人の経験の結果としての特定の価値よりも、その価値を獲得するために用いられる過程を重視するのである。価値明確化理論では、この過程を価値づくりの過程（process of valuing）と呼んでいる。⁴⁾

この価値づくりの過程には、3つに分かれた一連の過程があり、さらにその過程には7つの規準（criteria）がある。すなわち、

- (1) 選択すること
 - ①自由に選択すること
 - ②複数の選択肢の中から選択すること
 - ③それぞれの選択肢の結果についての十分な考慮の後で選択すること
- (2) 尊重すること
 - ④尊重し、大切にすること
 - ⑤肯定すること
- (3) 行為すること
 - ⑥選択に基づいて行為すること
 - ⑦繰り返すこと

である。⁵⁾

ラスらが「価値づくりの過程にとって決定的に重要なものとしてとらえている」⁶⁾ことは、(1)の「選択すること」という過程である。「選択すること」は、「価値の明確化」の過程において最も重視されているのである。したがって、「選択」という過程を位置づけていることこそ、「価値の明確化」における最大の特徴であるともいえる。ただし、ラスらが7つの規準全てを満たさないものは厳密な意味で価値ではないとしていることには、留意する必要がある。

なお、ラスらは、価値に向かっている行動

を、目標・目的、願望、態度、興味、感情、信念・確信、活動、困惑・問題・障害という8つのカテゴリーとしてまとめ、価値の指標 (value indicators) として示している⁷⁾。ただし、価値の指標はあくまでも「指標」であることには留意する必要がある。

『価値と教授』では、3過程に分かれた7つの規準を満たすことによって、はじめて価値となりうるとされているのである。

Ⅲ カーシェンバウムによる再公式化

価値明確化理論の主唱者の一人であるカーシェンバウムには、『価値明確化理論論文集』（1973年：サイモンとの編著）、『価値の明確化』（1972年、1978年、1995年：サイモン、L・W・ハウとの共著）、『価値明確化理論の進歩』（1977年）の著作がある。

『価値明確化理論の進歩』において、カーシェンバウムは、ラスらが提唱した3過程に分かれた7つの規準について次のようにいう。

「ある意味では、まさに『価値の明確化』という用語は、ある人々には、その人の諸価値について、単に明確にすること、もしくは『明らかになっている』ゴールを意味しているとともに、他の人々には誰か他の人の価値に快楽主義的な無関心を意味しているという、誤解に寄与したのである。すなわち、その人自身の諸価値に関して明らかにすることで十分であるということである。しかし、そうではなかった。個人的にも社会的にも、その人の立場に関する諸結果 (consequences) に対する関心は、常に明確にする過程の中心になっている。当初から、価値の明確化は、静的な『明瞭性』を奨励してこなかった。そうではなく、価値の明確化が評価されることは、講じられた行為を含む、その人の諸価値の継続的な発達 (ongoing development) にある。

それにもかかわらず、近年では、いくつかの懸念は、価値づくりの7つの過程、もしくは価値への規準に関するラスの構想から生じている。問題の一つは、規準に関する概念にある。その概念は、理論的には有用であるけれども、操作的ではない。―― (中略) ―さらに重要なことは、7つのサブプロセスは、諸価値を明確にし発達させる手段であるという、完全な価値づくりの過程を理解するには不十分にみえる。価値づくりの過程に関するより最新の公式化 (カーシェンバウム、1973年) は、『価値づくり』の概念をさらに拡張しているが、ラスによるオリジナルの7つの過程をベースにしているとともに、それらと一致しているのである。」⁸⁾

カーシェンバウムは、ラスらの提唱した3つの過程に分かれた7つの規準、すなわち、①自由に選択すること、②複数の選択肢の中から選択すること、③それぞれの選択肢の結果についての十分な考慮の後で選択すること、④尊重し、大切にすること、⑤肯定すること、⑥選択に基づいて行為すること、⑦繰り返すこと、を「7つのサブプロセス」としている。その上で、価値づくりの過程をより操作的に拡張するために、価値づくりの過程の再公式化を試みている。

カーシェンバウムが『価値明確化理論の進歩』において提唱している再公式化された価値づくりの過程は、次の5つの次元 (dimensions) からなるものである。

- I 思考 (thinking)
- II 感じること (feeling)
- III 選択すること (choosing)
- IV 伝えること (communicating)
- V 行為すること (acting)

なお、『価値明確化理論論文集』（1973年）においてカーシェンバウムが執筆している「価値明確化理論を超えて」では、感じることが最初であり、次いで考えること、言語

的・非言語的に伝えること、選択すること、⁹⁾
行為すること、という順序となっている。

再公式化された価値づくりの5つの次元について、カーシェンバウムは次のようにいう。

「ここで定義されているように、価値づくりの過程は、私たちの一般的な生活や特定の意志が、第1に私たちにとって積極的な価値を持ち、第2に社会的文脈 (social context) において建設的なものとするという公算を高めるための、過程なのである。価値づくりの過程の使用は、私たち自身や社会にとってよい意思決定を保証するものではなく、単に公算を高めるのである。」¹⁰⁾

カーシェンバウムは、「社会的文脈」を考慮することによって、ラスらの提唱した3過程に分かれた7つの規準 (カーシェンバウムによれば七つのサブプロセス) を、価値づく

りの過程の5つの次元として再公式化したのである。

チャザン (Barry Chazan) は、『道德教育への現代的アプローチ——代替理論の分析——』 (1985年) において、価値明確化理論を、道德教育への新しいアプローチの一つとして位置づけている。¹¹⁾ その際、チャザンは、価値明確化理論を以下の2つのバージョンに分けている。

VC1 : ラスらによる『価値と教授』

(1966年) におけるバージョン

VC2 : カーシェンバウムによる論文「価値明確化理論を超えて」 (1973年)、及び「価値明確化理論を明確にする——いくつかの理論的諸問題——」 (1976年) を典型例とするバージョン¹²⁾

そして、チャザンは、2つのバージョンの違いを、表1のようにまとめている。

表1 価値明確化理論の2つのバージョン

VC1 : ラスらによるバージョン	VC2 : カーシェンバウムによるバージョン
I. 選択すること (1) 自由に (2) 複数の選択肢から (3) それぞれの選択肢の結果についての十分な考慮の後で II. 尊重すること (4) その選択に幸福感を持ちつつ、大切にすること (5) 他者にその選択を肯定することをいとわないには十分なほどに III. 行為すること (6) その選択に従って何か行うこと (7) 何らかの生活のパターンとなるほどに繰り返すこと	I. 思考 (1) 様々なレベルでの思考 (2) 批判的思考 (3) より高いレベルでの道徳的推論 (4) 発散的、創造的思考 II. 感じること (1) 尊重し、大切にすること (2) 自分自身のよさを感じる (3) 自分の感情に気づく III. 選択すること (1) 複数の選択肢から (2) 結果を考慮すること (3) 自由に (4) 達成計画を立てる IV. コミュニケートすること (1) はっきりとしたメッセージを送る能力 (2) 共感-傾聴すること、他者の参照の枠組みを用いること (3) 葛藤の解決 V. 行為すること (1) 繰り返して (2) 一貫して (3) 私たちが行為する区域内で巧みに行為すること (コンピテンス)

Barry Chazan. *Contemporary Approaches to Moral Education: Analyzing Alternative Theories*, 48. New York: Teachers College Press; 1985. をもとに、中野が作成。

カーシェンバウムが提唱するV C 2の特徴について、チャザンは次のようにいう。

「カーシェンバウムは、他の人々との相互作用や関係性についてである『コミュニケーションすること』を、彼のモデルにおいて全く新しいカテゴリーとして導入している。----（中略）----こうした変更は、価値の分野における社会的文脈を大いに強調することを暗示するように思われる。改訂版のモデルは、ガイダンスあるいは価値の分野に対するコントロールの源として社会についての意識を間違いなく選ぶのではない一方で、価値づくりが行われる社会的文脈に対してより敏感であるように思われる。

同時に、V C 2はまた、価値づくりにおける個人の中心的位置に関する、さらなる強調とより根本的な肯定と見なされるかもしれない。----（中略）----V C 2は、『感じること』（V C 1の『尊重すること』に代わるものである）を深め、豊かにすると同様に、個々の思考（思考は今や四つに細分された別のカテゴリーである）を拡大し、個人化する。これが意味することは、個人が、価値づくりの過程における個人的な諸課題や諸技能に関するより詳細で複雑なセットに、今や責任を負うということである。」¹³⁾

チャザンは、カーシェンバウムが再公式化したモデルを、「コミュニケーションすること」が社会的文脈にかかわるものであり、「感じること」及び「思考」が個人的なことにかわるものであるとして位置づけているのである。

なお、日本では柳沼がカーシェンバウムの著作に言及し、「カーシェンバウムが提唱する価値明確化論の特徴は、子どもがただ価値観を表明するだけでなく、批判的、論理的、創造的、多角的に考えられるよう支援する点である。また、コミュニケーションを取り入れて、自他の価値観を交流させ、社会的文脈

において建設的なものにする点である。このように道徳的問題を主体的に考え、社会的文脈をふまえて総合的に判断しようとする方法は、デューイの道徳教育論と共通するところがある¹⁴⁾」として、デューイとの共通点を強調している。

IV ノディングズの『教育哲学』における価値明確化理論への評価

ノディングズは、『教育哲学』（1995年、2007年、2012年）において次のようにいう。

「デューイの倫理学理論を基礎とする道徳教育プログラムは存在するのであろうか。デューイの思考にルーツを持っていると主張しているものは存在する。価値の明確化プログラム（Values Clarification program）は、次のようなデューイの観念を反映している。すなわち、道徳の分野と他の分野における価値づくりとは区別されない。価値づくりの内容よりも価値づくりの過程が強調される。諸価値は行為の中に具現するものである。つまり、もし私たちが自分の生活をしていくのに何の役割も果たさないとするならば、私たちがその何かしらに価値を認めるというのは非論理的であるということである。」¹⁵⁾

ノディングズは、「価値づくりの内容よりも価値づくりの過程」を強調し、「諸価値は行為の中に具現する」ものであるがゆえに、「デューイの倫理学を基礎とする道徳教育プログラム」として、価値明確化理論を位置づけているのである。

その上で、ノディングズは、『教育哲学』の第2版（2007年）及び第3版（2012年）において、価値明確化理論の特徴を、チャザンが作成した前掲の表1に基づきながら次のようにいう。

「『価値と教授』において、ルイス・ラス、メリル・ハーミン、シドニー・サイモンは、選択の自由と思考の両方に大きな重点を置いている。表8-1（引用者註：前掲した表1のこと）を考えてみよう。第2版（引用者註：V C 2のこと）は、諸結果に関する分析（analysis of consequences）と複数の選択肢に関する考察（consideration of alternatives）という批判的思考（critical thinking）に対するその主張において、さらにデューイに近づいているように思われる。」¹⁶⁾

ノディングズは、諸結果に関する分析と複数の選択肢に関する考察という「批判的思考」を位置づけているという点において、カーシェンバウムの提唱するモデルがデューイにより近づいているとしているのである。

しかしながら、ノディングズは、価値明確化理論の問題点を、次のように指摘している。

「しかしながら、価値明確化理論の支持者によって制作された市販資料の一部は、『価値と教授』において記述された諸過程を簡略化しすぎている。あまりにも頻繁に、教師は生徒に彼らの諸価値について単に尋ねるように勧められている。だがこうしたことは、デューイや価値明確化理論の考案者達によって推奨された分析の種類を深く精査するものではない。価値明確化理論について判断をする前に、オリジナルの資料といくつかの批判の両方を読んだ方がいいかもしれない。と同時に、ジョン・デューイが、進歩主義教育の名の下にあまりにも寛大となってきたことに対して紳士的にたしなめたことを、忘れてはならない。」¹⁷⁾

ノディングズは、価値明確化理論が、理論的な面においてはデューイの思想に近づいていたけれども、教室での実践においては、理論的枠組みとの間で齟齬が生じてしまってい

るとしている。すなわち、教室での実践では、教師は生徒に対して彼らの諸価値について単に尋ねることのみに終始してしまっている、としているのである。生徒による価値の単なる表明にとどまるのではなく、省察を通しての価値づくりを促すことこそが価値明確化理論では目指していたのである。

ノディングズは、価値明確化理論の原点にもどることを推奨していると考えられることができる。というのも、ノディングズは、デューイの『経験と教育』における進歩主義教育に対する批判が、価値の明確化の名の下に行われた実践にも当てはまるとしているからである。ノディングズはまた、次のようにもいう。

「価値明確化理論はまた、デューイ自身の道徳理論に向けられた批判の一部にも晒されやすい。すなわち、道徳の分野と他の分野との間にいかなる区別もあるべきではないのか。私たちは、価値づくりを単なる過程としてだけで教えることができるのか。つまり、教えられるべき内容や特定の価値がある必要はないのか。道徳的行為を導く安定した集团的、普通的原理はないのか。」¹⁸⁾

ノディングズは、価値明確化理論に向けられる批判は、デューイの道徳教育理論に向けられた批判をも含んでいるとしているのである。しかしながら、ノディングズは、ここではデューイの道徳教育理論に向けられた批判を列挙するにとどまっておき、さらなる論証を行ってはいない。この意味で、ノディングズによるデューイの道徳教育論に関する言明は限定的なものといえる。

V 批判的思考と価値づくりとしてのケアリング

ノディングズは、チャザンの研究成果に拠りながら、カーシェンバウムによって再公式

化された価値明確化理論を、デューイの道德教育論を具現化したプログラムとして評価しつつも、その問題点を指摘していた。その一つが、価値明確化理論の名の下に行われた生徒の価値を単に尋ねることのみが強調された実践についてである。

一方、ノディングズがカーシェンバウムによって再公式化された価値明確化理論を評価している点は、カーシェンバウムが諸結果に関する分析と複数の選択肢に関する考察という「批判的思考」を位置づけている点においてである。ノディングズは、諸結果に関する分析と複数の選択肢に関する考察という「批判的思考」との関係においてデューイを位置づけている。つまり、ノディングズは思考の方法に関わる認識論の枠組みでデューイを位置づけているのである。しかしながら、価値とは何か、価値をいかに判断するか、価値はいかに形成されるかといった価値論との関係でデューイを位置づけているとは言い難い。

価値論との関連で、デューイとケアリング論を位置付けている先行研究としては、斎藤勉による研究がある。斎藤は次のようにいう。

「価値づくりとしてケアリングをとらえる見解からすると、ケアリングは行動的なふるまい（直接的な価値づくり）であるので、予見や予期、探求を通して値ぶみや見積り、評価に耐えるケアリングの再組織が可能な理論的枠組になっているといえる。」¹⁹⁾

斎藤は、ケアリングが「行動的なふるまい」であり「直接的な価値づくり」であるがゆえに、「値ぶみや見積り、評価に耐えるケアリングの再組織が可能」であるとしている。

ケアリング論から価値明確化理論を位置づけるとするならば、価値明確化理論で重視されている「選択」の礎がケアリングという「行動的なふるまい」によって形成されているということになる。換言すれば、ケアリン

グの結果として直接的な価値づくりが行われているがゆえに、「選択」が可能となるのである。

ノディングズの指摘する諸結果に関する分析と複数の選択肢に関する考察という「批判的思考」は、ケアリングの結果に基づく「選択」の中に位置づける必要がある。授業実践に即して考えるならば、子どもにその選択を行った理由を問うことによって過去・現在のケアリングを想起させたり、他の選択肢を考慮したのか、あるいは他の選択肢と比較したのか等を問うことが必要になるであろう。

と同時に、価値論の視点からするならば、そのケアリングがどのような結果をもたらしているのかという「結果についての予期や予見（anticipation or foresight of the outcome）」²⁰⁾を「選択」の中に位置づけていく必要もある。具体的には、仮説演繹的に「もし、その選択をしたならば、どのような結果になるであろうか」に問うことなどによって、子どもに結果に対する見通しを持たせるような教師の働き掛けが必要となるであろう。

本稿では、現代道德教育論の一つである価値明確化理論へのノディングズの評価を、『価値と教授』以降のカーシェンバウム、チャザンの研究を位置づけた上で考察してきた。キャラクター・エデュケーションなどの他の現代道德教育論へのノディングズの評価に関する考察は、今後の課題としたい。²¹⁾

【註】

1) 日本における価値明確化理論に関する最近の研究としては、以下のものを挙げるができる。

柳沼良太. 「生きる力」を育む道徳授業——デューイ教育思想の継承と発展. 東京:慶應義塾大学出版会;2012.

柳沼良太. 新旧の道徳授業の理論と実践. 吉田武雄、相澤伸幸、柳沼良太. 学校教育と道徳教育の創造. 58-113. 東京:学文社;2010.

尾高正浩. 「価値の明確化」の授業実践. 東京:明治図書;2006.

伊藤啓一. 統合的道徳教育論の構想と実践. 武藤孝典編著. 人格・価値教育の新しい発展——日本・アメリカ・イギリス——. 230-248. 東京:学文社;2002.

諸富祥彦. 道徳授業の革新——「価値の明確化」で生きる力を育てる. 東京:明治図書;1997.

山根耕平. 道徳教育への「価値明確化」理論のアプローチ——その概要と考察——. 神戸親和女子大学研究論叢. 1995;28:187-212.

なお、筆者によるこれまでの価値明確化理論に関する研究としては、以下のものがある。

中野啓明. 価値明確化理論の授業. 齋藤勉編著. 道徳形成の理論と実践. 120-142. 東京:樹村房;1993.

中野啓明. 価値明確化理論とデューイ. 日本デューイ学会紀要. 1995;36:122-126.

2) 本稿の「『価値と教授』における価値づくりの過程」に関する記述は、以下の拙論に基づいてる。中野啓明. 1993:120-125. 中野啓明. 1995:122-123.

3) 『価値と教授』の邦訳である遠藤昭彦監訳『道徳教育の革新——教師のための「価値の明確化」の理論と実践——』では、valuingを「価値づけ」と訳している。しかし、価値明確化理論の理論的背景として浮かび上がるデューイの価値論を参照するならば、「価値づけ」としてのvaluationを、valuingと区別すべきである。

この意味で、私はvaluingを「価値づくり」と訳している。

4) Louis E. Rath, Merrill Harmin, and Sidney B. Simon. *Values and Teaching: Working with Values in the Classroom*. 26. Columbus, Ohio: Charles E. Merrill Publishing Company;1966, 2nd ed.;1978. L・E・ラス、M・ハーミン、S・B・サイモン著. 遠藤昭彦監訳. 道徳教育の革新——教師のための「価値の明確化」の理論と実践——. 35-36参照. 東京:ぎょうせい;1991.

5) Ibid., 26-28. 邦訳書. 36-40参照。

6) Ibid., 31. 邦訳書. 45参照。

7) Ibid., 29-31. 邦訳書. 40-44参照。

8) Howard Kirshenbaum. *Advanced Value Clarification*. 9. La Jolla, California: University Associates;1977. 傍点は、原文ではイタリック体である。

9) Howard Kirshenbaum. Beyond Values Clarification. in Howard Kirshenbaum, Sidney B. Simon (Eds.). *Readings in Values Clarification*. 105-106. Minneapolis, Minnesota: Wiston Press; 1973.

10) Kirshenbaum. *Advanced Value Clarification*. 9-10. 傍点は、原文ではイタリック体である。

11) Barry Chazan. *Contemporary Approaches to Moral Education: Analyzing Alternative Theories*. New York: Teachers College Press; 1985.

12) チャザンは、V C 1を『価値と教授』の初版が出版された1966年のバージョンとしているが、『価値と教授』の第二版が出版されたのは1978年である。また、チャザンは、V C 2を1975年のカーシェンバウムによるバージョンとしている。しかし、チャザンは本文中において、カーシェンバウムの1973年の論文 (Howard Kirshenbaum. Beyond Values Clarification. in Howard Kirshenbaum, Sidney B. Simon (Eds.). *Readings in Values Clarification*. 92-110. Minneapolis, Minnesota: Wiston Press;

- 1973.)と1976年の論文(Howard Kirshenbaum. Clarifying Values Clarification: Some Theoretical Issues. in David Purpel, Kevin Ryan (Eds.) . *Moral Education: It Comes with The Territory*. 116-125. Berkeley, California: McCutchan;1976.)を明示しているのみである。チャザンが、カーシェンバウムのバージョンを1975年としているは、1977年の著作『価値明確化理論の進歩』の巻末に補遺として掲載されてる注釈付き文献目録に拠るものと思われる。
- 13) Chazan. 48-49.
- 14) 柳沼良太. 「生きる力」を育む道徳授業——デューイ教育思想の継承と発展. 119. 東京: 慶應義塾大学出版会;2012.
- 15) Nel Noddings. *The Philosophy of Education*, 156. Boulder, Colorado: Westview Press; 1995. Nel Noddings. *The Philosophy of Education*. 174-175. Boulder, Colorado: Westview Press; 2nd ed., 2007. Nel Noddings. *The Philosophy of Education*, 174-175. Boulder, Colorado: Westview Press; 3rd ed.,2012.
- 16) Noddings. 2nd ed.,2007:174-175. Noddings. 3rd ed.,2012:174-175.
- 17) Noddings. 2nd ed.,2007:175. Noddings, 3rd ed.,2012:175.
- 18) Noddings. 2nd ed.,2007:175. Noddings, 3rd ed.,2012:175.
- 19) 齋藤勉. デューイのケアリング論. 中野啓明、伊藤博美、立山善康編著. ケアリングの現在——倫理・教育・看護・福祉の境界を越えて——.88. 京都: 晃洋書房;2006.
- 20) John Dewey. The Field of 'Value'. in Jo Ann Boydston (ed.) . vol.16 of *The Later Works*. 347. Carbondale, Illinois: Southern Illinois University Press;1989. 中野啓明. 教育的ケアリングの研究. 127-129. 東京: 樹村房;2002.
- 21) 本稿は、2011年10月に行われた日本デューイ学会第55回研究大会での個人研究発表をもとに、修正を加えたものである。

【参考文献】

齋藤勉. デューイの教育的価値論. 東京: 福村出版;1983.